The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き : 直前形式との複合形態の観点からの分類
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 63-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53334
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き

—直前形式との複合形態の観点からの分類—

郡　史郎

要旨　東京方言の助詞・助動詞にはアクセントとしてどのような性質のものがあるかについて，直前形式とのアクセントとしての複合形態という観点を徹底させておこなった整理の結果と，関連する理論的問題についての検討結果を記した。ここでは助詞・助動詞のアクセントの性質を「乗っとり型」，「乗っとられ型」，「協力型」の 3 種に分けたが，ほとんどのものは「協力型」になる。分類結果と具体的なアクセントを表 2 と付表に示した。

1 はじめに

東京方言で助詞・助動詞が名詞・動詞・形容詞に付いた場合のアクセントは辞典や概説書に書かれた形を見ると非常に複雑で，無視できないゆれ（世代差，個人差，個人内変種）もある。学習者にとっては，助詞・助動詞にはアクセントとしてどのような性質のものがあるのか全体像が俯瞰でき，同時に個別の助詞・助動詞についての情報も得られるような簡潔なまとめがほしいところであるが，現行の辞典や概説書の記述はあいにくそのような需要を満たしてくれない。先行研究で示された分類の中にはかなり簡潔で上記の意味での実用性があるものもあるが，後述するように筆者としてはさらに簡素化できるように思える。

本稿は，助詞・助動詞のアクセントについて，その直前の形式（名詞と動詞・形容詞の活用形）との複合形態という点から再検討し，実用性を意識しながらおこなった 3 類型への分類結果と，関連する理論的問題についての現時点の考えを書き留めておくものである[1)]。

直前形式との関係に注目すること自体には取り立てて新しさはない。ここではこの観点からの整理を徹底させ，複合語や文節連続も含めた一般的なアクセントの複合形態の中に位置づけようとした点が従来と異なる。分類結果は表 2 にまとめ，稿末の付表に個々の助詞・助動詞がとる音調形を示す。

本稿では具体的な高低の形を［ダ┌イジョ┐ーブデス］のように角括弧ではさんだ表音カナに記号┌（上昇）と┐（下降）を付けることであらわす。特殊モーラでの上昇が前にずれた［┌ダイジョ┐ーブ］もふくめて便宜的に［ダ┌イジョ┐ーブ］と書く。

2 先行研究

辞書における解説として『国語発音アクセント辞典』『明解国語辞典』『新明解国語辞典（三版まで）』『明解日本語アクセント辞典』『新明解日本語アクセント辞典』『全国アクセ

1) 本稿では東京方言を母語としない日本語母語話者を念頭においた実用性の観点から，学校文法の枠組みを利用する。しかし，助詞・助動詞には固有のアクセント的特徴があると考える本稿の立場からすれば，学校文法式の活用形と助詞・助動詞で考えるか，あるいは語根と接辞の組み合わせで考えるかの違いが，助詞・助動詞あるいは接辞のアクセント的性質の分類結果に実質的な差をもたらすことはない。

ント辞典』のものがある。多くの助詞・助動詞のアクセントが記載されたものに佐久間鼎(1929), 三宅武郎(1934), 永田吉太郎(1935), 林大(1954), 早田輝洋(1965), 清水めぐみ(2001)（助詞のみ）がある。資料性の判断がむずかしいが小森法孝(1987), 酒井裕(1992)もある。

助詞・助動詞の側から見た分類案としては，和田實(1969)，木部暢子(1983)，匂坂芳典・佐藤大和(1983)，清水(2001)，田中宣廣(2005)，李連珠(2010)がある。和田(1969)は「独立する辞」「従属する辞」「融合する辞」の 3 分類を示す。有益な考察が多いが，個々の助詞・助動詞の性格付けとしては不徹底な面があるように本稿の筆者には思われる。木部(1983)は活用形の特徴も含めた分類であるため複雑である。匂坂・佐藤(1983)と佐藤(1998)は「従属型」「不完全支配型」「融合型」「支配型」の分類を示すが，提示例以外の助詞・助動詞をどの型と見るのかわかりにくい。清水(2001)は他より若い話者の資料という点で貴重だが，直前形式の品詞と表面的な高低にとらわれた分類になっている。田中(2005)は東京式アクセント以外も扱うが，東京については「従接式」「声調式」「独立式」「下接式」「支配式」で説明する。分類の枠組みには賛同できるところが多いが，直前形式の品詞による区別をしている点などについてさらなる整理が可能であるように思われる。李(2010)は前部要素のアクセントを手がかりとした 3 規則を設定し，どの規則が適用されるかという観点から動詞に付く助詞・助動詞を分類している。本稿の筆者は，助詞・助動詞は固有のアクセント的特徴を持ち，その基本的性質は前部のアクセント型からは独立であると考えるので，李案はとらない。ただ，その分類結果は後述する筆者のものとほぼ重なる。

助詞・助動詞，あるいは助詞・助動詞が付いた語形全体のアクセントの説明原理を扱った理論的研究としては，上記の早田(1965)のほか，McCawley, J. (1968), 奥田邦男(1980), Higurashi, Y. (1983), 屋名池誠(1987), 岡田英俊(1988), Zamma, H.(1992), Haraguchi, S. (1999), Yamaguchi, K.(2010)などさまざまある。助詞・助動詞が付いた語形のアクセントを規則や機械学習の形で導く工学的立場からの研究も上記の匂坂・佐藤(1983)以来さまざまあるが，本稿の目的からは外れるため省略する。

3 アクセントの複合形態

本稿では 2 つの要素のアクセント面での複合形態として，前部要素と後部要素それぞれのアクセント的特徴[2)]が生かされるか生かされないかということを考える。そして，その組み合わせによってできる 4 つの複合形態を「対等合併型」,「後部支配型」「前部支配型」「自立・協力型」とそれぞれ名づける。これらを後部要素（本稿の場合，助詞・助動詞）の側から見ると「**対等合併型**」「**乗っとり型**」「**乗っとられ型**」「**協力型**」となる。このような複合形態の類型は複合語にも同様に観察されるが，複合語についての詳細は別稿に譲る。次に複合形態の各タイプについて説明するが[3)]，表 1 にその全体像を示しておく。表 2 には複合形態ごとに分類した助詞・助動詞の一覧を示す。表では助詞・助動詞の内部と直前での下がり目を記号ˈで示している。分類に用いた音調形は秋永一枝（編）(2014)の「アクセント習得法則」と本文に記載のものである。同書に記載のない語形・音調形も一部書

2) 重要なのは下がり目の有無と位置。上がり目の有無と位置は環境依存だがアクセントの一部と見る。後述する「乗っとられ型」のように複合形でのみアクセントを発揮することを特徴とするものもある。
3) この部分の記述は拙稿（予定）と重なる点が多いが，そこでは複合語の例を中心に説明している。

表 1 アクセントの複合形態の一覧

		前部要素のアクセント的特徴が	
		生かされない	生きる
後部要素のアクセント的特徴が	生かされない	対等合併型 前部と後部それぞれの本来のアクセントとは無関係に，一致協力して全体としてある決まったアクセント型に融合する。「短期大学」，「練習問題」など複合語には多い。	前部支配型 （後部要素としては**乗っとられ型）** **例**：〈**さ**〉**せる**，〈**さ**〉**れる**，**ながら** 「泳ぐ・笑う」［オ⌜ヨ⌝グ・ワ⌜ラウ］に対してオ⌜ヨガセ⌝ル・ワ⌜ラワセルのように，前部のアクセント的特徴が複合形全体のアクセントを決める。
	生きる	後部支配型 （後部要素としては**乗っとり型）** **例**：**ます**，**ましょう** 「泳ぐ・笑う」［オ⌜ヨ⌝グ・ワ⌜ラウ］に対してオ⌜ヨギマ⌝ス・ワ⌜ライマ⌝スのように，後部のアクセントに合わせる形で複合形全体のアクセントが決める。	自立・協力型 （後部要素としては**協力型**） **助詞・助動詞の多く** 「空・桜」［⌜ソ⌝ラ・サ⌜クラ］に対して［⌜ソ⌝ラガ，サ⌜クラガ］あるいは［⌜ソ⌝ラマデ ～ ⌜ソ⌝ラ⌜p マ⌝デ，サ⌜クラマ⌝デ］のように，前部が自立し，後部は自分のアクセント的特徴を生かしつつ協力。

表 2　複合形態別の助詞・助動詞の一覧

乗っとられ型　（平板型動詞につく場合，下がり目⌜⌟はなくなる）
〈**さ**〉**せ**⌜⌟**る**#・〈さ〉⌜⌟せた#，**そ**⌜⌟**う**[**だ**]（推量）#，⌜⌟**ない**#，⌜⌟な⌜い（新形）*#・⌜⌟**な⌜かった***#・⌜⌟な⌜いで*#，**な**⌜⌟**がら**#，〈**ら**〉**れ**⌜⌟**る**#・〈ら〉⌜⌟れた#

乗っとられ型・乗っとり型の両方あり：　**た⌜い**#，たが⌜る#

乗っとり型　（前部要素を平らにしてここに示す助詞・助動詞のアクセントをつける）
⌜**つつ～つ⌜つ**，**な**#・なさ⌜い（命令）*#，**ま⌜す**#・ま⌜した#・ませ⌜ん#・ましょ⌜う#，
〈**よ**〉⌜**う**#（意思）

乗っとり型・協力型の両方あり：　**く⌜らい**，**だけ**・だけ⌜は，**ば⌜かり**#，**らし⌜い**

協力型　（前部要素にすでに下がり目がある場合，強調しないかぎり冒頭の⌜はなくなる）
▼**が**（格助詞），⌜**が**（逆説），⌜**かった**（形容詞），†**から**・から⌜は，**く～⌜く**・く⌜は（形容詞），⌜**くて**（形容詞），⌜**けど**，▼**さ⌜え**，⌜**し**（列挙・理由），⌜**しか～し⌜か～しか**，**そ⌜う**[だ]（伝聞），**だ**・だ⌜った*，だ⌜って*・だ⌜と*，**た**・た⌜ら・た⌜り，▼**だろ⌜う**，**て**・て⌜は・て⌜る・て⌜た・て⌜て，**で**・で⌜は（格助詞），▼**でしょ⌜う**，**で⌜も**，**で⌜す**・で⌜した，**と**（条件*），⌜**と**（引用），▼**と**・と⌜か・と⌜で（並列），⌜**な**（禁止），†**な⌜ど**，†**な⌜ら**[**ば**]，†**な⌜り**，▼**に**・に⌜は（格助詞），**に**（…しに行く），**の**（格助詞），⌜**のだ**・⌜ので，**の⌜み**，▼**は**，⌜**ば**（仮定），**へ**・へ⌜は，**ほど**・ほど⌜は，**ま⌜で**，**み⌜たい**[**だ**]，▼**も**，**や**・†や⌜ら，〈**よ**〉⌜**う**[だ]（推量），▼**よ⌜り**，▼**を**

・記号⌜：　そこに下がり目があることを示す。
・記号†：平板型動詞に低く付くことを示す（「すぐ泣くから」［⌜ス⌝グナ⌜ク⌝カラ］）。
・記号▼：　平板型動詞に低く付く言い方があることを示す（「負けるが勝ち」［マ⌜ケル⌝ガカ⌜チ］）。
・記号#：「動詞音便形＋て」の形（テ形）に接続するときは協力型になる。

き入れたが（右に*印），話しことば的でない助詞・助動詞は除外した。イントネーションの情報がより重要な終助詞については轟木靖子(2008)に譲り，表には含めなかった。

3.1 活用形のアクセント

動詞に助詞・助動詞が付いた語形全体のアクセントは，ひとつの動詞の（学校文法式の）活用形は共通のアクセントを持ち，それが助詞・助動詞のアクセントと複合すると考えることで説明できる。動詞には活用部分に下がり目がないタイプと，最後から 2 モーラ目の後に下がり目があるタイプのふたつがある。下がり目がないタイプの例として「笑う」と「浴びる」で言えば，活用形は［ワ˩ラワ・ワ˩ライ・ワ˩ラッ・ワ˩ラウ・ワ˩ラエ・ワ˩ラオ］，［ア˩ビ・ア˩ビル・ア˩ビレ・ア˩ビロ］で，単独で使用されない形も含めてすべて下がり目がないと考える。下がり目があるタイプの「泳ぐ」と「調べる」なら［オ˩ヨ˥ガ・オ˩ヨ˥ギ・オ˩ヨ˥イ・オ˩ヨ˥グ・オ˩ヨ˥ゲ・オ˩ヨ˥ゴ］，［シ˩ラ˥ベ・シ˩ラベ˥ル・シ˩ラベ˥レ・シ˩ラベ˥ロ］と，みな最後から 2 モーラ目の後に下がり目を持つと考える[4)]。

形容詞は学校文法の「赤かろ・赤かっ・赤く・赤い・赤けれ」そのままではなく，「くある」に由来する部分を独立させて考える[5)]。そしてその前の部分に下がり目がないタイプ，たとえば「赤い」に対する［ア˩カ・ア˩カイ］と，その最後から 2 モーラ目の後に下がり目があるタイプ，たとえば「白い」に対する［˩シ˥ロ・シ˩ロ˥イ］）があると考える。

3.2 複合形態①：対等合併型

対等合併型は，前部と後部のアクセント的特徴がどのようなものであれ，複合時には一致協力して全体としてある決まったアクセント型に融合するタイプの複合形態である。

複合語の例として「短期大学」で言うと「短期」と「大学」が［˩タ˥ンキ ＋ ダ˩イガク→ タ˩ンキダ˥イガク］のように融合する。複合名詞にはこの例のように後部要素の冒頭モーラの後に下がり目を持つ型になるものが多い。「捜査機関」［˩ソ˥ーサ＋˩キ˥カン→ソ˩ーサキ˥カン］は後部の本来のアクセントが本来の形で継承されているように見えるが，「教育大学」［キョ˩ーイク＋ダ˩イガク→キョ˩ーイクダ˥イガク］や「教育機関」［キョ˩ーイク＋˩キ˥カン→キョ˩ーイクキ˥カン］などの類例を考えると，すべて後部要素の冒頭モーラ後に下がり

---

4) たとえば「調べる」［シ˩ラベ˥ル］と「調べた」［シ˩ラ˥ベタ］ではアクセントが違うように見えるが，その違いは以下のように説明される。［シ˩ラベ˥ル］は全体としてひとつの単位としてその最後から 2 モーラ目の後に下がり目があると考える。［シ˩ラ˥ベタ］の方は，学校文法での扱いのようにシラベとタのふたつの単位に分け，シラベにはその最後から 2 モーラ目の後に下がり目があり，その後に「協力型」（後述）のタが接続したものと考える（シ˩ラ˥ベ+タ）。この扱いにより，動詞のアクセントには活用部分に下がり目がないタイプと，活用部分の最後から 2 モーラ目の後に下がり目があるタイプがあるという規則が，「調べる」にも「調べた」にも生きていると見ることができる。

学校文法の枠組みを離れるとすれば，si˩ra˥be という語根に最後から 2 モーラ目の後に下がり目を持つという性質があると考え，si˩rabe˥ru は，語根のアクセント的性質に全体が乗っとられる形で「乗っとられ型」（後述）の接辞 ru が付くために全体の最後から 2 モーラ目の後で下がる姿をとり，si˩ra˥beta は協力型の接辞 ta が付くために語根のアクセントの位置は動かず，全体の最後から 3 モーラ目の後で下がる姿をとると見る。

5) これは，「白く」は［˩シ˥ロク］（伝統形）だが，「赤く」には［ア˩カク］と［ア˩カ˥ク］の両形があることを説明するためには「く」をアクセントのふるまいの点で独立させる必要があることによる。

目を持つ型をとる仲間であり，「機関」が本来頭高型であることによる見かけ上の継承である。連用形接続の複合動詞（新形）は「動き始める」［ウ⌜ゴ⌝キ＋ハ⌜ジメル→ウ⌜ゴキハジメ⌝ル］のように最終モーラの前に下がり目を持つ型になる[6)]。

3.3 複合形態②：後部支配型（助詞・助動詞から見ると「乗っとり型」）

前部のアクセント的特徴とは無関係に，後部のアクセントに合わせる形で複合形全体のアクセントが決まるタイプの複合形態である。

複合名詞でも後部が長いものは「スーパーコンピュータ」が［⌜ス⌝ーパー＋コ⌜ンピュ⌝ータ→ス⌜ーパーコンピュ⌝ータ］のように複合形全体に対して後部のアクセントが適用される形，つまり後部要素の特徴が全体を支配する形で複合する。

助詞・助動詞では「ます」が典型的な乗っとり型である。「泳ぎ」「笑い」に「ます」が付くと，［オ⌜ヨ⌝ギ］［ワ⌜ライ］に対して［オ⌜ヨギマ⌝ス］［ワ⌜ライマ⌝ス］となり，否定形だと［オ⌜ヨギマセ⌝ン］［ワ⌜ライマセ⌝ン］となる。全体として見れば前部のアクセントの特徴にかかわらず後部要素の都合で全体のアクセントが決まる。つまり，後部要素の性質が全体を乗っとる乗っとり型である。

ただし，「泳いでます」「笑ってます」だと［オ⌜ヨ⌝イデ］［ワ⌜ラッテ］に対して［オ⌜ヨ⌝イデマス］（×オ⌜ヨイデマ⌝ス），［ワ⌜ラッテマ⌝ス］となり，後述の協力型の形をとる。動詞連用形に付ける命令の「なさい」も［オ⌜ヨギナサ⌝イ］［ワ⌜ライナサ⌝イ］という乗っとり型だが，やはり「て」が付いた形（テ形）に対しては［オ⌜ヨ⌝イデナサイ］［ワ⌜ラッテナサ⌝イ］という協力型になる。これについては，乗っとり型の助詞・助動詞が付く動詞がテ形になっている場合は，それを乗っとることができないと考えればよい。

3.4 複合形態③：前部支配型（助詞・助動詞から見ると「乗っとられ型」）

後部のアクセント的特徴とは無関係に，前部のアクセント的特徴が複合形全体のアクセントを決めるタイプの複合形態である。ただし，前部要素の単独発音時のアクセントがそのまま複合形に生かされるとはかぎらない。

短い複合名詞にはこのタイプのものがある。「素足」「素顔」「素肌」は，「足」［ア⌜シ⌝］，「顔」［カ⌜オ］，「肌」［⌜ハ⌝ダ］のアクセントにかかわらず［⌜ス⌝アシ］［⌜ス⌝ガオ］［⌜ス⌝ハダ］と頭高型になる。複合形全体のアクセントを前部要素が決めているわけである。

助詞・助動詞では「せる・させる」と「れる・られる」が典型的なこのタイプの助動詞である。「泳ぐ」「笑う」の［オ⌜ヨ⌝グ］「ワ⌜ラウ］に対して，［オ⌜ヨガセ⌝ル］［ワ⌜ラワセル］，［オ⌜ヨガレ⌝ル］［ワ⌜ラワレル］となり，全体でひとつのアクセント型をとる。ここでは前部の動詞のアクセントとして最後から 2 モーラ目に下がり目があるタイプ（泳ぐ）と下がり目がないタイプ（笑う）の違いが複合形全体に引き継がれているわけである。表面的には前部の本来のアクセントとは異なる形になっているが，前部要素の特徴が複合形全体のアクセントを決めているということなので，後部要素から見れば乗っとられ型と

---

6) 助詞・助動詞には明らかに対等合併型と呼べるものはない。「くらい」「ばかり」の一用法（空くらい［⌜ソ⌝ラ→ソ⌜ラク⌝ライ］，読むばかり［⌜ヨ⌝ム→ヨ⌜ムバ⌝カリ］）と「つつ」（読みつつ［⌜ヨ⌝ミ→ヨ⌜ミ⌝ツツ～ヨ⌜ミツ⌝ツ］）は，上述の「捜査機関」と同様の対等合併型とも考えうる。しかし，ここではこれらの助詞が語彙的特徴として全体の音調形を支配していると考えて次の後部支配型に分類する。

いうことになる。

「〈さ〉せる」と「〈ら〉れる」は動詞化接辞なので，もし下がるとすれば最後から 2 モーラ目の後である。つまり，そこに潜在的な下がり目がある。実際に下がるかどうか決めるのは直前形式である。

助詞「ながら」もこの乗っとられ型である。「泳ぎ」［オ˩ヨ˥ギ］,「笑い」［ワ˩ライ］に対して［オ˩ヨギナ˥ガラ］［ワ˩ライナガラ］となり，前部要素の下がり目の有無が複合形全体に継承されている。ただ，「泳ぎながら」が「な」の後で下がるのは「ながら」に潜在的な下がり目があることを示す。助動詞「ない」は伝統形の［オ˩ヨガ˥ナイ］［ワ˩ラワナイ］は乗っとられ型で，潜在的な下がり目が「ない」の前にある[7)]。

3.2 節で乗っとり型の助詞・助動詞は動詞のテ形の乗っとりができないことを見たが，乗っとられ型についても同じことが言える。「泳いでられる」「笑ってられる」は［オ˩ヨ˥イデラレル］［ワ˩ラッテラレル］となり，協力型の形をとる。「泳いでない」［オ˩ヨ˥イデ˩p ナ˥イ］,「笑ってない」［ワ˩ラッテナ˥イ］における「ない」も同様。つまり，乗っとられ型の助詞・助動詞は，それが付く形が動詞のテ形である場合は乗っとられることはない。

3.5 複合形態④：自立・協力型（後部要素から見ると「協力型」）

前部が自立し，後部は自分のアクセント的特徴を生かしながらも協力するタイプである。

複合名詞で言うと，「正体不明」［˩ショ˥ータイフ˩p メー］あるいは「中国南部」［˩チュ˥ーゴク˩p ナ˥ンブ］のように，全体としてひとつのアクセント型に融合せず前部と後部のアクセントがそのまま連結するタイプのものである。ただ，発音としては後部要素の高さの動きが抑えられ（記号 p はそのことを示す），抑え方が大きいと「正体不明」が［˩ショ˥ータイフメー］のような発音にもなる。後部要素のアクセントの音声的実現度を弱めて抑えることで全体としての一体感を持たせるためと考えられる。前部は自立していて後部が前部に協力することで一体となるということで自立・協力型と呼ぶ。これは「黒い猫」や「秋の空」のような，意味的な限定関係がある文節連続に生じるプロセスと同じである。

助詞・助動詞の多くがこのタイプに属するが，助詞・助動詞の側から見ると「協力型」ということになる。典型的として「まで」を取り上げると，この助詞が「空」［˩ソ˥ラ］に付く場合，助詞の意味を際だたせたければ［˩ソ˥ラ˩p マ˥デ］のように「空」でも「まで」でも上昇と下降をさせる[8)]。ただし，記号 p（音楽の強弱記号の piano）で示したように「まで」自身の上昇下降の大きさは「空」に比べて抑えられる。しかし，中立的な通常の発音では［˩ソ˥ラマデ］のように,「まで」の上昇下降は完全に消える形になる。秋永一枝（編）(2014)などでは助詞・助動詞内の上昇下降が消えた形のみが記載されている[9)]。

---

7) 新形は［オ˩ヨガ˥ナイ］［ワ˩ラワナ˥イ］。ふるいまいが例外的だが，前部要素しだいで下がり目の位置が変わるという意味で乗っとられ型。なお，新形と言っても 1930 年前後生まれの層にもこの言い方をする人が少なくない（御園生 2014）。秋永（編）(2014)には記載がないが「なかった」「ないで」は伝統形の話者でもこれと同じところで下がる。やはり秋永（編）には記載がないが，書きことば的な否定の「ず（に）」もゆれがあるようだ（オ˩ヨ˥ガズ［ニ］～オ˩ヨガ˥ズ［ニ］）。

8) 前川喜久雄・五十嵐陽介(2006)も参照。

9) ただし，同書の「アクセント習得法則」には,「みたい」と「ようだ」についてだけではあるがその

これに対し，「まで」が「桜」[サ⌜クラ] に付く場合は通常［サ⌜クラマ⌝デ］などとなり，「桜」の平板型が生かされ，「まで」の下降も生かされている。この場合でも「まで」の意味を特に際だたせたいときは［サ⌜クラ⌜マ⌝デ］となりうる。

このように，「まで」が付く場合は前部要素のアクセントは変容を受けない。そして助詞自身は，表面的な実現形は抑えられることがあっても，「ま」の後で下がるアクセントを持っていることは明らかである。つまり，これは自分のアクセントの表面的な実現形を抑えて前部要素のアクセントを生かすという協力型の助詞である。

3.6 自立・協力型に関する補足(1)： 「が」などの扱いについて

格助詞の「が・を・に・で・から・と」や「は・も」「ほど」も協力型と考えることができる。「が」で代表させて考えると，「桜が」[サ⌜クラガ]，「空が」[⌜ソ⌝ラガ] のように「桜」「空」のアクセントを変えることなく，その末尾と同じ高さで接続する。

ただし，和田(1969)は上記の助詞を「従属する辞」とし，「まで・より・など」などの「独立する辞」とは別の類型に分類する。また，川上(1966)は 1 モーラの助詞はアクセントの型を持っておらず，2 モーラのものと性格が異なるとする。

上記の助詞が名詞に付くとき，名詞のアクセントをそのまま生かす形で接続する。その点に注目すると，本稿の枠組みでは前部要素が全体のアクセントを決めているという意味で乗っとられ型にも見え，したがって「まで」等とは異なるようにも思える。しかし，こうした助詞は「には」「では」「からも」のような複合形では「まで」等と同じふるまいをし，「桜には」［サ⌜クラニ⌝ワ］(～サ⌜クラ⌜ニ⌝ワ)，「空でも」［⌜ソ⌝ラデモ］(～⌜ソ⌝ラ⌜p デ⌝モ]) となる。これは，これらの助詞が本来乗っとられ型ではないことを示す。乗っとられ型にも見えるのは単独では内部に下がり目がないからである。アクセント的に自立する前部要素に対して，内部に下がり目はないという特徴を生かしつつ協力するということで，上記の助詞も「まで」等と同じく協力型であると考える[10)]。「が」「は・も」の後には他の助詞は付かないが，それ以外で「に・で」等と異なる音調的ふるまいはしないので同様に扱う。

3.7 自立・協力型に関する補足(2)：助詞・助動詞を重ねる場合

「から⌉は，だけ⌉で，で⌉は，に⌉も，ほど⌉は」のように，協力型の助詞で単独では下がり目をもたないものが別の協力型の助詞に連続するときには，両者の境界に下がり目が生じる[11)]。ただし，後部の助詞を強調して発音する場合は下がり目は消える。また「ま⌉では，ま⌉でには」等は最初の下がり目が生きる。

アクセントが顕在化しうる旨の注釈がある（表 9，10 の注 1)。

10) これらの助詞は直前形式と一体化して全体として 1 アクセント単位の 1 語と同じふるまいをする（「タイガ」と「鯛が」，「柏」と「貸しは」など)。「が」（逆説）「けど」「し」「た」「て」「と」「な」のように直前で下がる助詞も同様である。これに対して「まで」等は直前形式と一体化して 1 アクセント単位と同じふるまいをすることが多いという点でこれらの助詞群とやや異なる。

11) これを，助詞自体に次に下げる力があるためとする考え方がある。奥田(1980)はそのひとつで，助詞末の下げが文ではあらわれないことについて「文節末のアクセント核は，音声表示のレベルでは下がり目として実現されない」と言う。しかし，文節末の下がり目が音にあらわれることは「花見た」と「鼻見た」が区別されることから明らかで（川上蓁 1963 参照)，助詞自体に次で下げる力があると考えると逆に矛盾が生じる。ここでは下がり目の挿入は複合形の特徴と見る。協力型ではないが「な⌉いで」も「ない」と「て」の間に下がり目が入り，それが特殊モーラのために前にずれると考えておく。

3.8 自立・協力型に関する補足(3):「順接」と「低接」について

この節と次節では，実用的観点からの重要性は小さいが理論的な問題を検討する。

「桜まで」の通常発音である［サ⌜クラマ⌝デ］では，「まで」の冒頭は「桜」の末尾の高さをそのまま引き継いでいる。「空まで」［⌜ソ⌝ラマデ］でも同様である。このように，協力型のうち通常の発音で直前の高さを受け継ぐ接続形式を**順接**と呼ぶことにする[12)]。

これに対し，助詞ではないが名詞に付く「たち」は協力型で典型的な**低接**の接辞である。平板型名詞の「私」［ワ⌜タシ］に対しては「私たち」［ワ⌜タシ⌝タチ］のように末尾に対して一段低く付き，起伏式の「ぼく」に対しては「ぼくたち」［⌜ボ⌝クタチ］と付く。「ぼく」の末尾ではすでに低くなっているので，それ以上積極的に下げて付くということはない（ボからクへの下降を引き継ぐ形でタチでも下がってはいくが積極的な下げではない）。

終助詞の「よ」には順接の用法と低接の用法がある（轟木靖子 2008 参照）。本稿では扱わないが，終助詞類の音調を考える際には順接と低接の区別が重要になる。

3.9 自立・協力型に関する補足(4)：平板型動詞の平板型と尾高型の発音について

助詞「など」は協力型だが，「笑うなど」［ワ⌜ラウ⌝ナド］，「浴びるなど」［ア⌜ビル⌝ナド］のように，平板型と言われる動詞の終止連体形に対して低く付く。実用上は「など」が協力型で，平板型動詞に低く付くことがわかればよい。しかし，ある助詞・助動詞が低く付くからと言って，それは助詞・助動詞が上述の低接の性質を持っているためだとは限らない[13)]。動詞の方が実はアクセントとして平板型ではなく尾高型であると考えると都合がよい場合がある。「など」「なり」「やら」がそうである。これらは平板型名詞に「桜など」［サ⌜クラナ⌝ド］のように同じ高さで付く点を見れば順接タイプの助詞である。同じ機能の助詞であれば名詞に付く場合も動詞に付く場合もアクセントとしての性質は同じと考えるのが自然だが，そうだとすると，「笑うなど」における「笑う」のアクセントは尾高型であり，それに順接の「など」が付いていると考えることで先行の品詞によらない一貫した説明ができる。また，「笑う場面」［ワ⌜ラウバメン］では「笑う」は平板型と考えられるので，平板型とされる動詞の終止連体形には実は平板型と尾高型の両形があることになる[14)]。

---

12) 「順接」は和田(1969)の用語だが，本稿では和田氏の用法とは違い，助詞助動詞の内部での変化の有無にかかわらず，接続のしかたがどうかのみに注目した概念として用いている。和田氏自身は「が」は順接だが「まで」は順接とは見ず「独立する辞」とする。これは内部で下降する点に独立性を見るからであろう。接続のしかたと内部での変化というふたつの次元が混在した概念になっているようである。

13) 理論的には以下の可能性がある。①動詞に付く場合の「など」は低接の性質を持つ；②この場合の「笑う」は尾高型である；③「など」が動詞に付くのは，動詞が引用として使われている場合であり，引用された形式の後にはイントネーション的現象として下降が入る；④以上のうちのいくつかの複合。

③について，引用の「と」は平板型の名詞に付く場合［サ⌜クラ⌝ト］のようになりがちだとされる（秋永一枝編 2014，表 5 注 1）。ただし，現代の実態としては下がらないことも多いようである。また，「立派な」や「ときどき」は「立派な人」［リッ⌜パナヒト］や「ときどき見ます」［ト⌜キドキミマ⌝ス］では平板型だが，クイズの答えを「正解は『立派な』です」［リッ⌜パナ⌝デス］，「正解は『ときどき』です」［ト⌜キドキ⌝デス］と言う場合は「です」の前で下がるようである。しかし「正解は『桜』です」［サ⌜クラデ⌝ス］は「です」の前で下がらない。こうした現象が生じるのは，引用であることを意識した発音では引用部の末尾を下げる（そしてポーズを置く）と考えるのが妥当かと思われる。

14) 平板式動詞の終止連体形のアクセントに平板型と尾高型の解釈ができることへの言及は以前からある（金田一春彦 1957，和田 1969）。早田(1965)は動詞語幹に両形を設定して整理をおこない，轟木(1995,

4 個別の助詞・助動詞の分類と具体的な音調形

アクセントの複合形態ごとに分類した助詞・助動詞の一覧は表 2 のとおりである。順接・低接の区別と平板型動詞の平板型と尾高型の区別は実用的には不要なので省略した。また，50 音順に並べた助詞・助動詞について具体的な音調形を稿末の付表にまとめた。付表では+記号は，その前後で分かれる協力型のアクセントであることを示す。+˥+は下がり目が先行形式のものか助詞･助動詞のものか決めがたいか，どちらでもないことを示す。

先述のようにいずれの表も秋永一枝（編）(2014)の「アクセント習得法則」と本文に挙げられた音調形を整理したものだが，同書で前部要素がこのままの形で記載されていないものも付表には含まれる。語形と音調形の右に*印を付けたものは同書に記載がない。

謝辞

草稿の内容へのコメントと情報をいただいた角道正佳氏と轟木靖子氏に感謝します。

2008)はこの区別を終助詞類に適用している。『新明解国語辞典』の第四版から第六版までは平板型動詞の終止形のアクセントを尾高型としていた（柴田武 1989 参照）。しかし，その根拠は引用の助詞「と」を付けた形での調査結果であり，それは助詞の影響と見るということで第七版では尾高型は記載されていない（上野善道 2012）。上村幸雄(1989)はすべて尾高型と見ているようである。

平板型動詞の終止連体形に平板型と尾高型があると見る根拠として，轟木(1995)は終助詞「か」と「さ」が名詞には同じ高さで付くが，動詞の終止連体形には通常低く付くことをあげる。本稿本文で述べた「など」「なり」「やら」のほか，「だろう・でしょう」「さえ」，格助詞「が」のふるまいも傍証になりうる。たとえば「桜でしょう」は［サ˩クラデショ˥ー］だが（順接），「笑うでしょう」は［ワ˩ラウデショ˥ー］と［ワ˩ラウ˥デショー］の両形がある。後者は三省堂編修所（編）(1958)等には記載がなく，新しい形かと思われる。ここで動詞に付く「でしょう」のアクセントが順接から低接に変化中だと考えると，名詞に付くときに順接しかないことが説明しにくい。それよりも「笑う」に平板型と尾高型の 2 種類があると考え，「でしょう」が付く場合は平板型から尾高型に変化中だと考える方が合理的である。格助詞「が」の場合は，「桜が」［サ˩クラガ］のように名詞には順接する。これに対し，「笑うが」は［ワ˩ラウ˥ガ］が現状では優勢のようだが［ワ˩ラウガ］もある。三省堂編修所（編）(1958)には後者のみがあがり，秋永一枝（編）(2014)では格助詞と明記の上で両形が記載されている。佐久間(1929)は動詞に付く「が」などは後者式の発音だとするが，例外も認める。もし動詞に付く「が」に順接と低接の 2 種類があると考えると，名詞に付くときに順接しかないことが説明しにくい。ここでも「笑う」に平板型と尾高型の 2 種類があると考え，助詞が付く場合の現在の主流は尾高型だと考える方が合理的であろう。

ただし，上で傍証になりうるとしたものには，直前形式を引用形扱いするために下がる発音が含まれている可能性がある。尾高型と引用の 2 要因が複合していると考えるのが現実的かもしれない。

平板型と尾高型の区別は，平板型動詞の音便形に「た」「て」が付く形（タ形・テ形）や連用形，そして平板型形容詞の終止連体形に対しても考えるのが有用である。「笑った顔」［ワ˩ラッタカオ］，「笑って許す」［ワ˩ラッテユル˥ス］の「笑った」「笑って」は平板型だが，「笑ったやら」［ワ˩ラッタ˥ヤラ］，「笑ってから」［ワ˩ラッテ˥カラ］という発音における「笑った」「笑って」は，本文に記した考え方をすれば尾高型となる。「笑っては」「笑ってた」も同様。連用形は，「桜さえ」［サ˩クラサ˥エ］に対する「笑いさえ」［ワ˩ライサ˥エ～ワ˩ライ˥サエ］のゆれが平板型と尾高型の設定により説明しやすくなる。「さえ」は佐久間(1929)，金田一(1952)では低く付く形だけが出ている。助詞が付く連用形は終止連体形とは逆に尾高型から平板型への変化傾向が考えられるが，「笑いはしない」［ワ˩ライ˥ワ］は尾高型。

ただし，名詞には直接付かない助詞・助動詞では，禁止の「笑うな」［ワ˩ラウ˥ナ］の「な」や，「笑うけど」［ワ˩ラウ˥ケド］の「けど」のように，要素境界での下降が活用部分の特徴なのか助詞・助動詞の性格なのかが決められないものがある。

引用文献

秋永一枝（編）(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第 2 版』三省堂.

上村幸雄(1989)「現代日本語 音韻」亀井孝他（編）『言語学大辞典第 2 巻』1692-1716，三省堂.

上野善道(2012)「アクセント表示について」『新明解国語辞典 第七版』三省堂.

岡田英俊(1988)「東京方言の複合語アクセント記述の体系」『言語研究』94, 50-74.

奥田邦男(1980)「生成音韻論から見た辞のアクセント」『国語教育研究』（広島大学）26 上，473-482.

川上蓁(1963)「『花高し』と『鼻高し』—東京アクセント段階観の限界—」『音声学会会報』82，6-8.

川上蓁(1966)「体言につく一拍の助詞のアクセント」『音声の研究』12, 239-253.

木部暢子(1983)「付属語のアクセントについて」『国語学』134, 23-42.

金田一春彦(1943)「標準語アクセントの解説」『明解国語辞典』三省堂.

金田一春彦(1952)「標準アクセントの手引き」『明解国語辞典 改訂版』三省堂.

金田一春彦(1957)「日本語アクセント卑見」『国語研究』（国学院大学）7, 1-32.

郡史郎（2015 予定）「アクセントの複合形態と長い複合語のアクセント」.

小森法孝(1987)『日本語アクセント教室』新水社.

匂坂芳典・佐藤大和(1983)「日本語単語連鎖のアクセント規則」『電子情報通信学会論文誌 D』J66-D (7), 849-856.

佐久間鼎(1929)『日本音声学』京文社（風間書房復刻版 1963）.

酒井裕(1992)『音声 アクセント クリニック』凡人社.

佐藤大和(1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上）』233-265.

三省堂編修所（編）(1958)『明解日本語アクセント辞典』三省堂.

柴田武（1989）「アクセント表示について」『新明解国語辞典 第 4 版』三省堂.

清水めぐみ(2001)「東京語の助詞のアクセント」『国語研究』（国学院大学）64, 32-63.

神保格・常深千里(1932)『国語発音アクセント辞典』厚生閣.

田中宣廣(2005)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう.

田中ゆかり(2010)『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.

轟木靖子(1995)「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208, 1-8.

轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」『音声言語Ⅵ』5-28.

林大(1954)「アクセント私見」『跡見学園紀要』1, 71-82.

早田輝洋(1965)「動詞・形容詞などの活用とアクセント」『文研月報』4 月号, 30-39/73，折り込み付表.

平山輝男(1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版.

前川喜久雄・五十嵐陽介(2006)「2 モーラ有核助詞の韻律上の独立性—『日本語話し言葉コーパス』の分析—」『音声研究』10(2)，33-42.

御園生保子(2014)「高年齢層生え抜き話者における東京方言動詞否定形のアクセント」『日本方言研究会第 99 回研究発表会 発表原稿集』

屋名池誠(1987)「述部のアクセント—現代東京方言述部の形態=構文論的記述[3]—」『学苑』573, 106-91,.

李連珠(2010)「動詞活用形におけるアクセント交替規則」『日本語研究の 12 章』444-457，明治書院.

永田吉太郎(1935)「旧市域の音韻語法」斎藤秀一（編）『東京方言集』18-143，私家版.（活字復刻版：国書刊行会 1976）

和田實(1969)「辞のアクセント」『国語研究』（国学院大学）29, 1-20.（徳川宗賢編『論集日本語研究 2 アクセント』有精堂出版 1980 所収）

Haraguchi, Shosuke (1999) "Accent." in Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, 1-30. Blackwell.

Higurashi, Yoshiko (1983) *The accent of extended word structures in Tokyo Standard Japanese*. Tokyo: Educa Inc.

McCawley, James D. (1968) *The phonological component of a grammar of Japanese*. Hague : Mouton.

Yamaguchi, Kyoko (2010) "The difference in accentuation between the present and the past tenses of verbs in Japanese" 『音声研究』14(3), 1-10.

Zamma, Hideki (1992) "The accentuation system of Japanese inflection." *Tsukuba English Studies* 11, 117-148.

	乗っとられ型	乗っとり型	協力型	注	名詞 起伏式	名詞 平板式	動詞 起伏式		動詞 平板式		形容詞 起伏式	形容詞 平板式
					「空」	「桜」	「泳ぐ」	「調べる」	「笑う」	「浴びる」	「白い」	「赤い」
が（格助詞）			①②	注10参照	「ソ˥ラ+ガ	サ「クラ+ガ	オ「ヨ˥グ+ガ	シ「ラベ˥ル+ガ	①ワ「ラウ˥+ガ，②ワ「ラウ+ガ	①ア「ビル˥+ガ，②ア「ビル+ガ	シ「ロ˥イ+ガ	ア「カ˥イ+ガ
ˈが（逆接）			○		「ソ˥ラ+ダ+ガ*	サ「クラ+ダ+˥+ガ*	オ「ヨ˥グ+ガ	シ「ラベ˥ル+ガ	ワ「ラウ+˥+ガ	ア「ビル+˥+ガ	シ「ロ˥イ+ガ	ア「カ˥イ+ガ
ˈかった （形容詞）			○								「シ˥ロ+カッ+タ シ「ロ˥+カッタ*	ア「カ+˥カッ+タ
†から，からˈは			○		「ソ˥ラ+カラ 「ソ˥ラ+ダ+カラ*	サ「クラ+カラ サ「クラ+ダ+˥+カラ*	オ「ヨ˥グ+カラ	シ「ラベ˥ル+カラ	ワ「ラウ˥+カラ	ア「ビル˥+カラ	シ「ロ˥イ+カラ	ア「カ˥イ+カラ
く ／ ˈく （形容詞） くˈは			①②								「シ˥ロ+ク	①ア「カ+ク ②ア「カ+˥ク
ˈく△て （形容詞）											「シ˥ロ+ク△+テ →シ「ロ˥ク△+テ	ア「カ+˥ク△+テ
くなˈる* （形容詞）											「シ˥ロ+ク+ナル →シ「ロ˥ク+ナル	ア「カ+ク+ナˈル
くˈらい		②	①		①ˇソ˥ラ+クライ ②ソ「ラク˥ライ	サ「クラ+ク˥ライ	①オ「ヨ˥グ+クライ ②オ「ヨグク˥ライ	①シ「ラベ˥ル+クライ ②シ「ラベルク˥ライ	ワ「ラウ+ク˥ライ	ア「ビル+ク˥ライ	①シ「ロ˥イ+クライ ②シ「ロイク˥ライ	ア「カイ+ク˥ライ
ˈけど			○		「ソ˥ラ+ダ+ケド*	サ「クラ+ダ+˥+ケド*	オ「ヨ˥グ+ケド	シ「ラベ˥ル+ケド	ワ「ラウ+˥+ケド	ア「ビル+˥+ケド	シ「ロ˥イ+ケド	ア「カ˥イ+ケド
ˈければ （形容詞）											「シ˥ロ+ケレバ シ「ロ˥+ケレバ*	ア「カ+˥ケレバ
さˈえ			○		「ソ˥ラ+サエ	サ「クラ+サ˥エ	オ「ヨ˥グ+サエ／ オ「ヨ˥ギ+サエ	シ「ラベ˥ル+サエ／ シ「ラ˥ベ+サエ	①ワ「ラウ˥+サエ／ワ「ライ˥+サエ ②ワ「ラウ+サ˥エ／ワ「ライ+サ˥エ	①ア「ビル˥+サエ／ア「ビ˥+サエ ②ア「ビル+サ˥エ／ア「ビ+サ˥エ	シ「ロ˥イ+サエ	ア「カイ+サ˥エ
〈さ〉せ(ˈ)る・〈さ〉(ˈ)せた*	○			動詞化			オ「ヨガセ˥ル オ「ヨガ˥セ+タ*	シ「ラベサセ˥ル シ「ラベサ˥セ+タ*	ワ「ラワセル ワ「ラワセ+タ*	ア「ビサセル ア「ビサセ+タ*		
ˈし （列挙・理由*）			○		「ソ˥ラ+ダ+シ*	サ「クラ+ダ+˥+シ*	オ「ヨ˥グ+シ	シ「ラベ˥ル+シ	ワ「ラウ+˥+シ	ア「ビル+˥+シ	シ「ロ˥イ+シ	ア「カ˥イ+シ
し△か ／ ˈし△か			①②	「しˈか」もあり	「ソ˥ラ+シ△カ	①サ「クラ+シ△カ ②サ「クラ+˥シ△カ	オ「ヨ˥グ+シ△カ	シ「ラベ˥ル+シ△カ	①ワ「ラウ+シ△カ ②ワ「ラウ˥+シ△カ	①ア「ビル+シ△カ ②ア「ビル˥+シ△カ		
そ(ˈ)う［だ］（推量）	○			動詞連用形			オ「ヨギソ˥ーダ	シ「ラベ「ソ˥ーダ	ワ「ライソーダ	ア「ビソーダ	シ「ロソ˥ーダ	ア「カソーダ
そˈう［だ］ （伝聞）			○				オ「ヨ˥グ+ソーダ	シ「ラベ˥ル+ソーダ	ワ「ラウ+ソ˥ーダ	ア「ビル+ソ˥ーダ	シ「ロ˥イ+ソーダ	ア「カイ+ソ˥ーダ
た，たˈら，たˈり			○				オ「ヨ˥イ+ダ	シ「ラ˥ベ+タ	ワ「ラッ+タ	ア「ビ+タ		
だ， だˈった*，だˈって*，だˈと*			○		「ソ˥ラ+ダ 「ソ˥ラ+ダ+ッタ*	サ「クラ+ダ サ「クラ+ダ+˥+ッタ*						
た(ˈ)い	○	()		形容詞化			オ「ヨギタ˥イ	シ「ラベタ˥イ	ワ「ライタイ　ワ「ライタ˥イ*	ア「ビタイ 《ア「ビタ˥イ*》		
たが(ˈ)る	②	①		動詞化			オ「ヨギタガ˥ル	シ「ラベタガ˥ル	①ワ「ライタガ˥ル ②ワ「ライタガル	①ア「ビタガ˥ル ②ア「ビタガル		
だけ，だけˈは*		①	②		①ソ「ラダケ ②ˇソ˥ラ+ダケ	サ「クラダケ	①オ「ヨグダケ ②オ「ヨ˥グ+ダケ	①シ「ラベルダケ ②シ「ラベ˥ル+ダケ	ワ「ラウダケ	ア「ビルダケ	①シ「ロイダケ ②シ「ロ˥イ+ダケ	ア「カイダケ
だろˈう			①②		「ソ˥ラ+ダロー	サ「クラ+ダロ˥ー	オ「ヨ˥グ+ダロー	シ「ラベ˥ル+ダロー	①ワ「ラウ+ダロ˥ー ②ワ「ラウ˥+ダロー	①ア「ビル+ダロ˥ー ②ア「ビル˥+ダロー	シ「ロ˥イ+ダロー	①ア「カイ+ダロ˥ー ②ア「カ˥イ+ダロー
ˈつ△つ ／ つ△ˈつ		①②		動詞連用形			①オ「ヨギ˥ツ△ツ ②オ「ヨギツ△˥ツ	①シ「ラベ˥ツ△ツ ②シ「ラベツ△˥ツ	①ワ「ライ˥ツ△ツ ②ワ「ライツ△˥ツ	①ア「ビ˥ツ△ツ ②ア「ビツ△˥ツ		
て，てˈは， てる*，ている*，てみˈる* てˈた*，てˈて*			○				オ「ヨ˥イ+デ オ「ヨ˥イ+デ+ル* オ「ヨ˥イ+デ+タ*	シ「ラ˥ベ+テ シ「ラ˥ベ+テ+ル* シ「ラ˥ベ+テ+タ*	ワ「ラッ+テ ワ「ラッ+テ+ル* ワ「ラッ+テ˥+タ*	ア「ビ+テ ア「ビ+テ+ル* ア「ビ+テ˥+タ*	「シ˥ロ+ク△+テ →シ「ロ˥ク△+テ	ア「カ+˥ク△+テ
で，でˈは			○		「ソ˥ラ+デ	サ「クラ+デ						
でしょˈう			①②		「ソ˥ラ+デショー	サ「クラ+デショ˥ー	オ「ヨ˥グデショー	シ「ラベ˥ルデショー	①ワ「ラウデショ˥ー ②ワ「ラウ˥デショー	①ア「ビルデショ˥ー ②ア「ビル˥デショー	シ「ロ˥イ+デショー	①ア「カイ+デショ˥ー ②ア「カ˥イ+デショー
でˈす，でˈし△た*			○		「ソ˥ラ+デス	サ゛クラ+デ゛ス					シ「ロ˥イ+デス	ア「カ˥イ+デス
でˈも			○		「ソ˥ラ+デモ	サ゛クラ+デ゛モ						

	乗っとられ型	乗っとり型	協力型	注	名詞 起伏式	名詞 平板式	動詞 起伏式		動詞 平板式		形容詞 起伏式	形容詞 平板式
					「空」	「桜」	「泳ぐ」	「調べる」	「笑う」	「浴びる」	「白い」	「赤い」
と，と'か，と'で（並列）			①②		「ソ˥ラ+トカ	サ「クラ+ト˥カ	オ「ヨ˥グ+トカ	シ「ラベ˥ル+トカ	①ワ「ラウ˥+トカ ①ワ「ラウ+ト˥カ	①ア「ビル˥+トカ ②ア「ビル+ト˥カ	シ「ロ˥イ+トカ	①ア「カ˥イ+トカ ②ア「カイ+ト˥カ
と（条件*）			○		「ソ˥ラ+ダ+ト*	サ「クラ+ダ+˥+ト*	オ「ヨ˥グ+ト	シ「ラベ˥ル+ト	ワ「ラウ+ト	ア「ビル+ト	シ「ロ˥イ+ト	ア「カイ+ト
'と （引用）			○		「ソ˥ラ+ト	サ「クラ+˥ト	オ「ヨ˥グ+ト	シ「ラベ˥ル+ト	ワ「ラウ+˥ト	ア「ビル+˥ト	シ「ロ˥イ+ト	ア「カ˥イ+ト
'な （禁止）			○				オ「ヨ˥グ+ナ	シ「ラベ˥ル+ナ	ワ「ラウ+˥+ナ	ア「ビル+˥+ナ		
な，なさ'い* （命令）		○					オ「ヨギナ	シ「ラベナ	ワ「ライナ	ア「ビナ		
(')ない《伝統形》	○						オ「ヨガ˥ナイ	シ「ラベ˥ナイ	ワ「ラワナイ	ア「ビナイ		
(')な'かった*，(')な'いで* (')な'い《新形》*	○			要注意			オ「ヨガ˥ナカッタ* オ「ヨガ˥ナイ*	シ「ラベ˥ナカッタ* シ「ラベ˥ナイ*	ワ「ラワナ˥カッタ* ワ「ラワナ˥イ*	ア「ビナ˥カッタ** ア「ビナ˥イ*		
てな'い*，くな'い*			○				オ「ヨ˥イ+デ+「ナ˥イ*	シ「ラ˥ベ+テ+「ナ˥イ*	ワ「ラッ+テ+ナ˥イ*	ア「ビ+テ+ナ˥イ*	「シ˥ロ+ク+「ナ˥イ*	ア「カ+ク+ナ˥イ*
な(')がら	○						オ「ヨギナ˥ガラ	シ「ラベナ˥ガラ	ワ「ライナガラ	ア「ビナガラ		
†な'ど			○		「ソ˥ラ+ナド	サ「クラ+ナ˥ド	オ「ヨ˥グ+ナド	シ「ラベ˥ル+ナド	ワ「ラウ˥+ナド	ア「ビル˥+ナド	シ「ロ˥イ+ナド	ア「カ˥イ+ナド
†な'ら［ば］			○		「ソ˥ラ+ナラ*	サ「クラ+ナ˥ラ*	オ「ヨ˥グ+ナラ	シ「ラベ˥ル+ナラ	ワ「ラウ˥+ナラ	ア「ビル˥+ナラ	シ「ロ˥イ+ナラ*	ア「カ˥イ+ナラ*
†な'り （＝なりと，でも）			○		「ソ˥ラ+ナリ	サ「クラ+ナ˥リ	オ「ヨ˥グ+ナリ	シ「ラベ˥ル+ナリ	ワ「ラウ˥+ナリ	ア「ビル˥+ナリ		
に，に'は*			①②	注10参照	「ソ˥ラ+ニ	サ「クラ+ニ	オ「ヨ˥グ+ニ	シ「ラベ˥ル+ニ	①ワ「ラウ˥+ニ／ワ「ライ˥+ニ ②ワ「ラウ+ニ	①ア「ビル˥+ニ／ア「ビ˥+ニ ②ア「ビル+ニ	シ「ロ˥イ+ニ	ア「カ˥イ+ニ
に （～しに行く・来る）			○	動詞連用形			オ「ヨ˥ギ+ニ	シ「ラ˥ベ+ニ	ワ「ライ+ニ	ア「ビ+ニ		
の			特殊	2モーラ以上の尾高型を平板型化	「ソ˥ラ+ノ ヤ「マ+ノ （山）	サ「クラ+ノ						
'のだ，'ので，'のに，'のは （～なのだ）			○		「ソ˥ラ+ナ+ノ+ダ	サ「クラ+ナ+˥+ノ+ダ	オ「ヨ˥グ+ノ+ダ	シ「ラベ˥ル+ノ+ダ	ワ「ラウ+˥+ノ+ダ	ア「ビル+˥+ノ+ダ	シ「ロ˥イ+ノ+ダ	ア「カ˥イ+ノ+ダ
の'み			○		「ソ˥ラ+ノミ	サ「クラ+ノ˥ミ	オ「ヨ˥グ+ノミ	シ「ラベ˥ル+ノミ	ワ「ラウ+ノ˥ミ	ア「ビル+ノ˥ミ	シ「ロ˥イ+ノミ	ア「カイ+ノ˥ミ
は			①②	注10参照	「ソ˥ラ+ワ	サ「クラ+ワ	オ「ヨ˥グ+ワ	シ「ラベ˥ル+ワ	①ワ「ラウ˥+ワ／ワ「ライ˥+ワ ②ワ「ラウ+ワ	①ア「ビル˥+ワ／ア「ビ˥+ワ ②ア「ビル+ワ	シ「ロ˥イ+ワ	ア「カ˥イ+ワ
'ば （仮定）			○				オ「ヨ˥ゲ+バ	シ「ラベ˥レ+バ	ワ「ラエ+˥+バ	ア「ビレ+˥+バ		
ば'かり		②	①		①「ソ˥ラ+バカリ ②ソ「ラバ˥カリ	サ「クラ+バ˥カリ	①オ「ヨ˥グ+バカリ ②オ「ヨグバ˥カリ	①シ「ラベ˥ル+バカリ ②シ「ラベルバ˥カリ	ワ「ラウ+バ˥カリ	ア「ビル+バ˥カリ	①シ「ロ˥イ+バカリ ②シ「ロイバ˥カリ	ア「カイ+バ˥カリ
へ，へ'は*，へ'も*			○		「ソ˥ラ+エ	サ「クラ+エ						
ほど，ほど'は*			○		「ソ˥ラ+ホド	サ「クラ+ホド	オ「ヨ˥グ+ホド	シ「ラベ˥ル+ホド	ワ「ラウ+ホド	ア「ビル+ホド	シ「ロ˥イ+ホド	ア「カイ+ホド
ま'す・ま'し△た，ませ'ん・ ましょ'う		○					オ「ヨギマ˥ス	シ「ラベマ˥ス	ワ「ライマ˥ス	ア「ビマ˥ス		
ま'で			○		「ソ˥ラ+マデ	サ「クラ+マ˥デ	オ「ヨ˥グ+マデ	シ「ラベ˥ル+マデ	ワ「ラウ+マ˥デ	ア「ビル+マ˥デ	シ「ロ˥イ+マデ	ア「カイ+マ˥デ
み'たい［だ］			○		「ソ˥ラ+ミタイ	サ「クラ+ミ˥タイ	オ「ヨ˥グ+ミタイ	シ「ラベ˥ル+ミタイ	ワ「ラウ+ミ˥タイ	ア「ビル+ミ˥タイ	「シ˥ロイ+ミタイ	ア「カイ+ミ˥タイ
も			○	注10参照	「ソ˥ラ+モ	サ「クラ+モ	オ「ヨ˥グ+モ	シ「ラベ˥ル+モ	①ワ「ラウ˥+モ，②ワ「ラウ+モ	①ア「ビル˥+モ，②ア「ビル+モ	シ「ロ˥イ+モ	ア「カ˥イ+モ
や，†や'ら			○		「ソ˥ラ+ヤ（ラ）	サ「クラ+ヤ（˥ラ）	オ「ヨ˥グ+ヤラ	シ「ラベ˥ル+ヤラ	ワ「ラウ˥+ヤラ	ア「ビル˥+ヤラ	シ「ロ˥イ+ヤラ	ア「カ˥イ+ヤラ
〈よ〉'う （意思）		○					オ「ヨゴ˥ー	シ「ラベヨ˥ー	ワ「ラオ˥ー	ア「ビヨ˥ー		
よ'うだ （推量）			○				オ「ヨ˥グ+ヨーダ	シ「ラベ˥ル+ヨーダ	ワ「ラウ+ヨ˥ーダ	ア「ビル+ヨ˥ーダ	シ「ロ˥イ+ヨーダ	ア「カイ+ヨ˥ーダ
よ'り			①②		「ソ˥ラ+ヨリ	サ「クラ+ヨ˥リ	オ「ヨ˥グ+ヨリ	シ「ラベ˥ル+ヨリ	①ワ「ラウ˥+ヨリ ②ワ「ラウ+ヨ˥リ	①ア「ビル˥+ヨリ ②ア「ビル+ヨ˥リ	シ「ロ˥イ+ヨリ	①ア「カ˥イ+ヨリ ②ア「カイ+ヨ˥リ
らし'い		①	②	ふさわしいの意では①のみ	①ソ「ララシ˥ー ②「ソ˥ラ+ラシー	サ「クララシ˥ー	①オ「ヨグ+ラシ˥ー ②オ「ヨ˥グ+ラシー	①シ「ラベルラシ˥ー ②シ「ラベ˥ル+ラシー	ワ「ラウラシ˥ー	ア「ビルラシ˥ー	①シ「ロイラシ˥ー ②シ「ロ˥イ+ラシー	ア「カイラシ˥ー
〈ら〉れ(')る，〈ら〉(')れた*	○			動詞化			オ「ヨガレ˥ル オ「ヨガ˥レ+タ*	シ「ラベラレ˥ル シ「ラベラ˥レ+タ*	ワ「ラワレル ワ「ラワレ+タ*	ア「ビラレル ア「ビラレ+タ*		
を			①②	注10参照	「ソ˥ラ+オ	サ「クラ+オ	オ「ヨ˥グ+オ	シ「ラベ˥ル+オ	①ワ「ラウ˥+オ，②ワ「ラウ+オ	①ア「ビル˥+オ，②ア「ビル+オ	シ「ロ˥イ+オ	ア「カ˥イ+オ